

『トビラをあけて』

ヤスイミキオ

2,652 文字

【あらすじ】

いつも玄関掃除を欠かさなかった母は、「綺麗な玄関は幸せを呼ぶ」と言っていた。けれども、両親は離婚。そんな家庭を見てきた娘は、掃除なんてお構いなしの生活を送るようになる。でも、恋をしたことで、自分のためではなく、大切な人やモノを迎えるための掃除、という行為の大切さに気付くのだった。

まだ薄暗い夜明け。定期的な短いリズムで繰り返される、ほうきの掃く音で、私は目を覚ました。大きく欠伸をひとつ。のろのろとベッドを出て、眠い目を擦りながら、階段をゆっくりと降りていく。

階下には小さな玄関があって、これまた、小さなほうきを持った母が熱心に掃除をしている。

「ママ、何してるの？」

母親は手を止めずに私に答える。

「あ、おはよう。何って、お掃除に決まってるじゃない」

「こんな時間に……？」

「こうやってね、朝から玄関を綺麗にしておくと、幸せがやってきてくれるの」

「幸せ？」と、ぼんやりした頭で、私は聞き直す。

「そう、幸せ。玄関ってその家を表す鏡なんだから……」

確かに、小さな頃から、わが家の玄関はチリひとつ無く、いつも綺麗に整えられていた。靴は脱いだら、すぐ靴箱に。時には季節の花なんかも飾られていた気がする。でも、わが家が幸せだったかどうかは、正直分からない。むしろ、どこにでもよくある、普通の家だったと思う。変わったところ、と言いつても、それさえ今では良くあることかもしれないけれど、一つあるとしたら、私が小学六年生になる頃、父と母は、離婚した。その後父とは一度も会っていない。

そして、専門学校生になった今になって、ふと思うときがある。あれは朝になっても帰ってこない父を、母はずっと待っていたんじゃないだろうか、と。

整理整頓、何事にも厳しく潔癖な母に嫌気が指して、父は逃げ出したのだ。

その反動というわけではないけれど、一人暮らしで自由になった、私の部屋の玄関は汚い。駅から近いという理由だけで選んだ、よくある 1K。玄関を入るとすぐにキッチン、左手にユニットバス、右手が猫の額ほどのリビング。スニーカーはそこらに脱ぎっぱなし。ホコリも溜まっている。「母が見たら、泣くだらうな。いや、そんなことないか」。

実際、この部屋に住んでから、男にこと欠いたことはない。といっても、彼氏ではない、男に、だ。

千鳥足で階段を二階まで登り、ドアを開ける。「うわっ、きったねー」と、隣の男が声を上げる。

「何か問題あんの？ さっき言ったじゃん」と、私は言う。

「いや、別にないけど……」

「これぐらいスキがあった方がいいでしょ？」私はそう言い、男に抱きつき、キスをする。そのまま、ベッドになだれ込むのがいつものパターンだ。そして、ことの最中に、ふと思ったりする。

「あれ、この人、誰だっけ……カラオケでナンパしてきた男？ 飲み屋でおごってくれた男だっけ……。まあ、毎度のことだし、いいか」

翌朝目覚めて、隣を見ると、誰もいない。「夢か？」と一瞬思う。でも、脱ぎ捨てられた自分の下着を見て、「ああ、やっぱりアルか」と、なぜかちょっと安心して、再び眠りにつくのがオチだった。

鈴木くと知り合ったのは、学校の飲み会だった。その日は、二日酔いがひどくて、そのまま帰ろうと思ったが、我が悪友もあり親友のレイコに、昨日の男のことを話さず帰るのももったいないと、ちょっと顔を出した飲み会の同じテーブルに、彼はちょこんと座っていたのだ。

和気あいあいと飲んでいたのは覚えている。でも、途中、「デスクが汚い奴は仕事ができない」とか、そんな話になった頃から私の記憶は怪しくなった。

「デザインとか言ってるけどさ、私の家の玄関、汚いんだよね」

「へー、そうなんですか？ でも、綺麗な外見なのに、そのギャップが、いいんじゃないですかね？」と、調子いい鈴木くんの合いの手に、気をよくしたのもあったかもしれない。」私は、またも飲みすぎてしまった。電池が切れたように、体調が悪くなってしまい、心配してくれた鈴木君が、「家の方向が同じだから」と、送ってくれることになったのだ。

そしてこれは、後日聞いた話だけど、帰路の電車の車中、私は、よくいる酔っぱらいよろしく「ごめんね」を何遍も繰り返していたという。その度に、彼は「大丈夫です、大丈夫です」と返してくれていたらしい。

鈴木くんに下心があったかどうかは分からない。けれどもずっと好意は持っていてくれたらしい。でも、彼いわく、帰ろうとしたのに、「とりあえず珈琲でも飲んでいけ」と強引に誘ったのは、私だと言う。ドアを開けた瞬間、「あ……」と、鈴木くんが声を出したような気がした。

「足、そこ気をつけてくださいね。靴踏まないように」自分の家だというのに、私は捕まった宇宙人のように、なすすべもなく、ベッドへと運ばれた。

結局、珈琲なんて淹れないまま、私はさっさと一人で寝てしまい、終電を逃した鈴木くんは、そのまま私の家に泊まり、始発でこっそりと帰って行った。

翌朝、目を覚ました私は、うっすらと記憶をたどりながら、ルーティーンのように下着を確認してみたが、しっかり昨日のままだった。ボンヤリした頭のまま、玄関横のトイレに向かう。その瞬間、「あ……」と、思わず声が出た。玄関のスニーカーや革靴が、綺麗に整頓されていたのだ。

ふと見れば、張り紙がある。「昨日はお疲れさまでした。玄関綺麗にしておく、いいことがあるって、昔お袋が言ってました。また、飲みましょう。今度は珈琲、お願いします」。

「なんか、モーレツに恥ずかしい」。私はクシャッと紙を丸める。が、思い立って、もういちど開いて見返してみる。考えてみればとても変な話だが、自分の知ってる誰かを誘って、といっても今回は事故のようなものだけど、部屋に招き入れたのは生まれて初めてのことだった。

その日から、私は玄関掃除を欠かさなくなった。綺麗になった玄関は、一人で帰ってくると、なんだか時々、白々しくも見える。でもちょっと何かが始まりそうな、ウキウキした気分にもさせてくれる。そして「ただいま」とドアを開けて帰ってくるうちに、私はあることに気づいた。「綺麗にするって、自分が気持ちよく暮らすためだと思ってたけど、それだけじゃない、きっと大切な人やモノを迎えるためでもあるんだ」と。そして、「お母さんはきっと、お父さんに帰ってきてほしくて、いつも綺麗にしていたのかもしれないな」と。

チャイムの音に、ソファから立ち上がり、ドアを開ける。鈴木くんが立っている。

「こんばんは。この前は、どうも……」。手にはケーキを持っている。

「……中、どうぞ」と私は言う。

「あ」と鈴木くんが、間の抜けた声を出す。

「何？」

「玄関……」

「綺麗にしとくと、いいことあるんでしょ？ それに……今度は珈琲、ちゃんと淹れるから」

鈴木くんの顔が、笑顔になる。二人の背後で、ゆっくりとドアが閉まっていく。(了)